

次年度に向けた講座の改善点

(1) 授業改善サポーターの定義

- ：学内に指導力の向上を牽引する授業コンサルテーションを実施できる人材
- ：授業改善や評価、教員のカウンセリングやコーチング、授業改善に関するアドバイスや提言の提供、教員の授業計画や教材の開発支援等が出来る人材

(2) 授業改善サポーター養成講座の実施

- ：(1)の上で、以下の資質・要件を達成できるような授業改善サポーター養成講座を開発・実施した
 - ：授業改善サポーターとして、各種ツールを活用して授業改善のためのコンサルテーションを行うことが出来る
 - ：自校における授業コンサルテーションの普及を目指した施策を、個人レベル、組織レベルで提案することが出来る
 - ：授業改善サポーターとして相談し支援し合えるコミュニティを形成する
- したがって、効率的に授業コンサルテーションを行う
- 教員のモチベーションを保つような授業コンサルテーションを行う

(3) 授業改善サポーター養成講座の結果、以下の課題が見られた。

1. 研修時期の課題

課題をこなす時間を確保することが難しいと感じる受講生が多かった。

2. 事前課題のアクセスと内容の課題

事前課題にアクセスできる期間を早めてほしいという意見や、事前課題が難しいという意見があった。また、事前課題におけるモジュールCが難しいという意見もあった。

3. 事前説明の時間不足

オリエンテーションをはじめとする事前説明が十分に行われていなかったため、研修中の講師の指示を一度で理解しきれない受講生がいた。これに対して委員からは、細かい説明を十分に伝える時間が少なかったのではないかという意見が挙げられた。

4. 実践例と具体性の欠如

理論のみならず、実践例を知りたい受講生の声があった。また、前述したモジュールCが抽象的であったため、分かりづらかったという意見があった。

5. 研修参加者の属性を汲み取り切れていない課題

受講生の属性を考慮しきれず、「自分の」授業を改善したい人と、本事業が目指す「授業改善サポーター」になりたい人が混ざった状態で研修が行われていた。

6. 組織レベルでの働きかけの欠如

授業改善サポーターとして個人が活躍した様子は見られたが、受講生が所属組織に働きかけ授業改善コンサルティンクを実施するのは難しいという現状が見られた。

7. コミュニケーションと交流の不足

他グループとの交流機会が不足していることが明らかである。さらに、同じ人が発表をしており、発表者の多様性の欠如が示された。

8. オンラインコミュニケーションツールの課題

研修1はMoodle掲示板を使っていたが、研修2、研修3ではコミュニティを活性化させるためにDiscordに切り替えた。ただし、Discordに慣れない受講生もいた。研修1（対面研修）にてDiscordの使い方を丁寧に教えた場合、Discordを使いにくいと感じる受講生が減るのではないかと意見が出た。

9. オンラインツールと設備の課題

Zoom、Moodle、Discordの運用、Wi-Fi環境、オンラインを通じた資料共有に困難さを抱える受講生がいた。

(4)(3)を受けて、次年度は、以下の改善点を検討する。

1. 研修時期の再検討

研修時期を夏頃に変更し、研修全体を年内に終了させるスケジュールを組み、余裕をもって研修に臨めるよう調整する。

2. 事前課題の提示時期の前倒しと内容の見直し

そのために、以下4点を実施する

- ①事前課題の提示時期を前倒しし、時間に余裕をもって課題に対応できるようにする。
- ②モジュールの事例を専門学校にすることで、事前課題内容をより身近な例にする。
- ③各モジュールの動画教材化や要約文の配布などの改善をする。
- ④一定期間のサポート期間を設け、不明点に回答する機会を提供することも検討する。

3. 研修時間・研修フレームワークの再検討

コミュニティ活性化のために研修時間を改めて検討し、研修回数を増やしつつオリエンテーションを実施する必要性が示唆された。その際は、事前課題・研修当日・事後課題にかかる時間も考慮する必要がある。また、研修フレームワーク（研修回数や頻度、内容、研修講師の必要条件等）を調整したい。

4. 養成講座の対象者の精緻化

参加対象者の属性を考慮し、研修を組み立てる必要がある。また、受講生の要件定義を精緻化することで、本事業が想定する養成講座の対象者を募る必要がある。そのために、自分の授業を改善したい教員ではなく、授業見学等を通して他教員の授業を改善したい教員の募集を引き続き行いたい。

5. 組織的なバックアップ

授業改善サポーターの重要性と役割について働きかけを行い、授業改善サポーターとしての活動を実施しやすくなる環境づくりを補助する必要がある。

6. グループ学習の積極的な取り入れ

グループ学習を積極的に取り入れ、学校間の垣根を超える授業体制を実施する。ただし、グループ学習時には、講師がワーク内容を丁寧に解説することが重要である。

7. オンラインコミュニケーションツールの選定

今後使用するオンラインコミュニケーションツールについては、改めて検討を行う。また、オンラインコミュニケーションツールが確定した場合、オリエンテーションにてレクチャーを実施する。

8. 学習環境の整備

充電コンセントの増設や、模造紙やポストイットの活用方法の伝授など、学習環境の整備が必要である。さらに、Zoomを使用した研修でも、チャットツールの活用促進や機材の不具合チェックを事前に行う。

9. 研修の評価設計の精緻化

来年度のフォローアップ研修の実施や、教職員の上長による研修成果の評価システムの設置をすることで、評価設計の精緻化を検討する。

10. 今年度の講座参加者から各校での授業改善事例や課題を収集する

今年度の講座参加者から各校での授業改善事例や課題を収集することで、専門学校の実例に即したモジュール開発を実施し、講座改善をしたい。

11. コマシラバスの書き方（ガニエの9教授事象、学習目標の明確化）についての授業内容を取り込む

授業改善サポーターとして若手教員のコンサルティングをする場合は、コマシラバスの書き方から他教員への指導をする必要があるため、コマシラバスの書き方（ガニエの9教授事象、学習目標の明確化）は詳しく授業内容に取り込みたい。

12. 講座の汎用・標準化を実施する

本講座を汎用・標準化するために、講座の講師に必要な資質を定義しなおし、要件を満たした教員であれば誰でも実施可能な講座にする必要がある。

以上